

どろぐり ころころ

—NPO 法人フリーキッズヴィレッジにおける暮らしの継承としての日常構法の提案—

建築学専攻 2326011 横関 あかね

研究指導教員 若松 均

1. はじめに

現代私たちの暮らしは、食材や衣服、インフラがカタログのようにあらかじめ用意され、それらを選び取り日々消費することで生活を送っている。建築も同様に、すでにデザインされたものを自分の理想の生活と重ね合わせて様々な条件からより良いものを選ぶことが一般的となってきた。

一方で、本研究対象として訪れたフリーキッズヴィレッジでの生活は、自然豊かな山里の中で生活に関わる食や建物を大人子ども関係なく自らの手や体験を通して作り出している。そこでは、失敗しながらもなんとかやってみることで「生きる力」を持った人たちが集う場所だった。

現代このような、自らが創造し生産する暮らしを知らない子どもたちに向けて、フリーキッズヴィレッジのような場所を伝え、「生きる力」を育てる拠点として存続していくべきである。

1.1 NPO 法人フリーキッズヴィレッジ

長野県伊那市高遠町三義で活動する「フリーキッズヴィレッジ(以下、FKV)」では、被虐待児、障がいのある子どもたち、不登校やひきこもりなど、生きづらさを抱えている子どもたちを受け入れ、豊かな自然環境の中での共同生活を通じて療養・活動できる場を提供している。具体的には、農作業体験、自給自足生活体験、自然体験、環境教育プログラムを提供し子どもたちの精神的、体力的な成長を促すと共に、地域住人との交流による地域社会活性化の促進、更に国際交流・フェアトレード支援を図る事業を通じ国際的友好親善に貢献することを目的とした活動を行なっている。

1.2 FKV の活動拠点

FKV によって運営、連携している施設が高遠町・伊那市内に全7拠点(図1)点在する。伊那市街地の中に街の居場所としての「伊那まちBASE」、山間の産後の母子の伊那所としての「渦巻山荘」、高遠町市街地にギャラリー・母子支援施設としての「塩原助産所」、高遠町の山間にファミリーホームの「FKV 本部」、馬と共同生活を

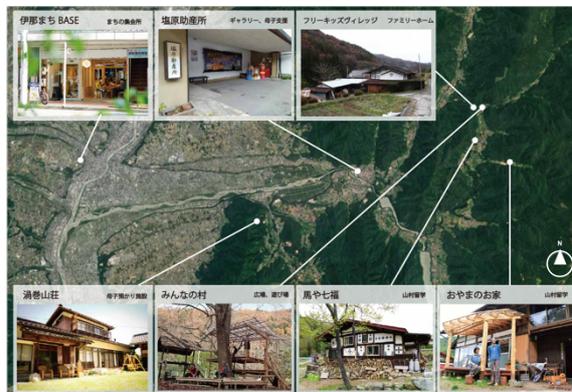


図1 FKV の拠点

送り山村留学の受入れをおこなう「馬や七福」、標高 1000 m を越えた山里にあるリトリートハウスの「おやまのお家」、廃校の校庭を活用し子どもたちの遊び場、野外活動の拠点として「みんなの村」が運営されている。これらの施設同士が連携し、FKV の活動が行われている。

1.3 研究目的

FKV の願いは現状の活動の維持だけでなく『だれもが心豊かに平和に生きられる村を七世代先*¹の未来の子どもたちに伝えていくこと』を主題とし長期的に FKV の暮らしが継承されることを試行している。本研究では、現状の建築のあり方とセルフビルドを通じたコミュニティの循環を分析し、長期的な建築を通じた行為や人ものつながりによって持続されるコミュニティのあり方を提案する。

1.4 研究方法

FKV の7拠点の内、地域の広場として公共的な[みんなの村]が今後 FKV の活動を存続していく拠点であるという前提のもと、[みんなの村]を対象に現地でのフィールドワークを通して以下3つの調査を実施した。

- ① 過去の活動調査
(聞き込み調査、過去の記録¹⁾より)
- ② FKVの活動とセルフビルドの位置付け
(敷地内のセルフビルド9件の実測、記述)
- ③ セルフビルドのデザインコードの考察
(ディテールから生成プロセスの分析)

2. 『みんなの村』の参与観察

2.1 過去の活動調査と考察

FKVの過去の記録に掲載された[みんなの村の全体マップ]や[建設WS時の日記]、FKVのスタッフの方々への[聞き込み調査]により2004年から現在までのみんなの村の変遷を図2のように示した。これらから、「みんなの村」が様々なイベントやWSなどの会場として使われていく『ハレ』と、日常的に地域住民の活動の場として使われる『ケ』としての二面性により、その時の暮らしに必要な機能を果たすために建物が増築、減築され流転していることが明らかになった。また、20年間の活動の中で合計21件(現存するのは9件)の建物が建設され広い敷地の中で日々居場所と作ることで大きな場所の読替えが行われていることがわかる。機能に関しても一時的な居場所や遊具として公共的で小規模なものが建設される傾向にある。

以上のことから、みんなの村は今後も“決まりきった場所の使い方が維持され続ける”のではなく、“日々場所を読み替えながら拠点を移動させていく”ことが予想される。

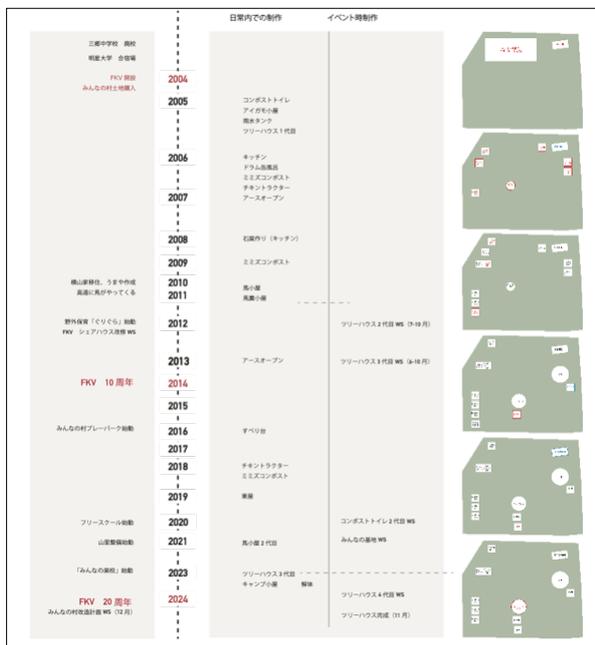


図2 FKVの活動とみんなの村の変遷



図3 みんなの村に現存する建物の配置とリスト

2.2 各セルフビルドの記録

みんなの村に現存する9つのセルフビルドを対象に実測を行い、それらの概要を5W2H²⁾の項目で整理しデータシートにまとめた(図3)。

以上のように各建物を整理すると、様々な人や材料によって建てられていることがわかる。

2.3 メッシュワークによる記述

これまでの分析より各建物の項目の整理をおこなったが、FKVでの営みはこの項目の中だけ表現し難い、人・もの・時間を含めたストーリーがあり、その流動的な状態がこの場所の特徴であると考えた。そこで本研究では動的な状態を可視化し記述する方法としてメッシュワークを使用し、セルフビルドの分析を行う。

メッシュワークは人類学者のティムインゴルドの著書『ライズ』^{2),3)}によって提示されたもので、ライン群のつくりあげる構造として「ネットワーク」比較して説明される(図4)。ネットワークでは点が重要であり、ラインは点と点とをつないでいるにすぎず、連結器として接続関係を表現するだけである。一方メッシュワークは、ラインの絡み合いが形成する編み物のような構造であり、ここではラインは「踏み跡」と呼ばれ、それぞれのラインが何らかの実体、意味のある軌跡を指している⁴⁾。無機的な連結器とは異なり、一本一本にストーリーが付随している。このようなメッシュワークの視点で建築を記述することで、生成の動きなどの情報が可視化され、建築のプロセスやその形のアイデンティティを明らかにすることができる。と考える。

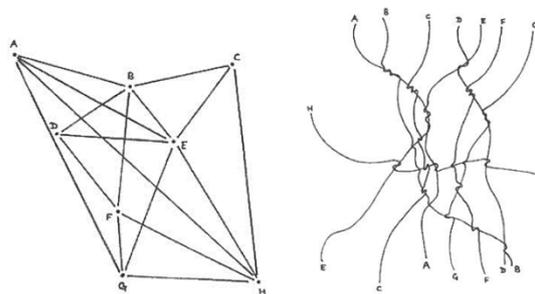


図4 ネットワーク(左)とメッシュワーク(右)

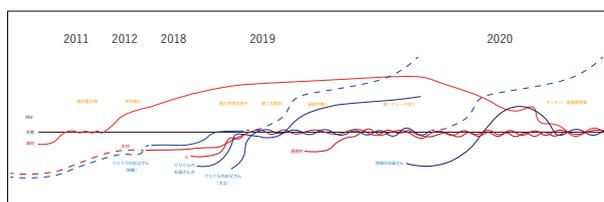


図5 (例) 東家のメッシュワーク

以上の記述(図5)を行ったことにより、本研究では以上のメッシュワークを活用し時間軸や生成の中での動きをより動的なものとして記述する。建築を『動的な生の軌道が集まった現象』として捉えることができる。また、みんなの村の建物は合理的に建てられる一般的な建設方法に比べ、多くの生が絡み合いながら長い時間をかけ日々少しずつ形を変え建築ができて行くことが可視化された。また、今後のコミュニティを継続して行く為の手がかりとして、『各建築が常に開かれ、独立して存在するものではなく建築同士が絡み合っていること』『コミュニティ外の要因(人・もの・イベント)がみんなの村に関わってくること』が場所の維持につながっていることが明らかになった。

3. 日常構法

3.1 建築の寿命と創り続けること

一般的な木造建築の寿命(完成から解体されるまでの平均)は65年といわれている。設計者は断熱性・気密性の向上や耐久性のある材を使用することで寿命を延ばし、建築が長く残ることに価値を置くことが多い。一方で、FKVにおける木造建築の寿命は3-10年と短命である。既存の形は残らないものの解体した材を活用し新たな建築が生まれて行く(図6)。これらは1つの建築の寿命に焦点が置かれるのではなく、材の生涯が続き、自然のものの成り行きに合わせた建築の姿であると考え。このように、FKVのコミュニティを継承していくためには、長く残るような建築の保存方法ではなく、これまでのあり方通り、建築を建てては壊し、常に人や材や形が変化・循環していくあり方が必要であると考え。

3.2 伝統構法と日常構法

一般的に建てられる建築に比べ、みんなの村の建物は多くの人の手垢が残り、可変性を持ち続けている。これは、建築に対して作ることに使うことにヒエラルキーがなく、「つくること」は「育てること」のように見える。

このような建物は、様々な人がその場にあった材料と応答した結果として、様々なアイデンティティを持った形になっている。そのため、伝統構法にみられるような木組みや工程ではないものの、その場での即興的なアイデアや偶然的な材の出会いによって形作られている。



図6 日常的に変化する建築



図7 日常構法によってできた建物の特徴

本研究ではこのような建築の造られ方を、『日常構法』と名づけ、このような建物が持つ可変性の特徴を類型化し以下にまとめた(図7)。

- I 増築：既存に対して試行した形跡が残る
- II 材の転用：元の形跡が残されたまま使用する
- III 見立て：形の類似性から別の物で代用する
- IV 不完全さ：付加要素が付くようなとっかかり
- V 取り替えやすさ：工程や接合部の可視化
- VI スケール感：子どもでも手の届く高さ,大きさ

4. 設計

4.1 小さな種まき

以上の分析より、FKVが七世代先まで存続していくには、短期的・長期的な視点で建築を計画していく必要があると考える。本設計では、①現在から20年後までこれまでの活動を残していくため拠点をみんなの村へ整備し(A,B)、②何世代先までも残っていくための将来的なつながりのきっかけとなる拠点を町内、市内、県内、都内へと拡張させ(C,D,E,F)合計6拠点の計画を行う。(図8) みんなの村に初めに整備するAは今後ものづくりの起点となる仕事場・資材置き場としての「加工場」と、FKVのコミュニティの「集会所」とする。Bは「託児所」とFKVの活動に興味を持った新しいお母さんたちを受け入れる「待合所」の設計を行う。

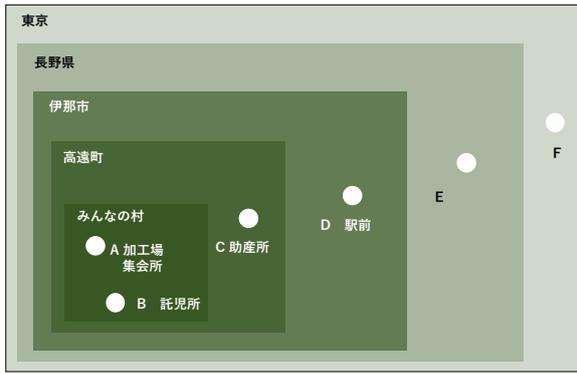


図8 拠点拡張のイメージ



図9 材の活用によるディテールの設計

また、離れた拠点(C, D, E, F)ではそれぞれの地域とFKVの活動を結ぶような建築の提案を行う。

4.2 足跡を残すように

本設計ではみんなの村に既存で残された廃材や今後外部から流通が予想される材を想定し、現場で建築を即興的に建てるように材料との応答（その材の持ちうる形の可能性を確認し合うこと）を行って設計を行う。また、これまで通りFKVの活動の中のセルフビルドによって建てられるよう、建設の工程を含め設計する(図9, 10)。

B: 託児所 母家の屋根をかけるための足場であった部分はあえて解体せず、残された状態にしておく。その後、様々な構成要素や機能の付加によって活用・室内化され、気づけば母屋と一体となった建築となる。このように建設のプロセスがそのまま建築の姿として残り次々と新たな場所が現れてくるような建築のあり方を提案する(図11)。

5. 総括

本研究では日常的な建築の行為を通して、自分と他者(人や材、そして自分自身)と応答し繋がりを強化する「コミュニケーションツール」としての道具的な建築のあり方と、1つの完結した物体ではなく生の軌道の集合が現象として現れているという建築を捉える試みをおこなった。このような建築の捉え方から、七世代という長期的な時間の中での建築が果たす役割の1つとして、思いや命や記憶を紡いでいくものであることが明らかになった。

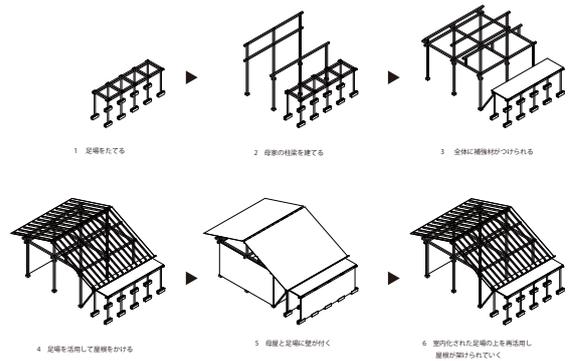


図10 セルフビルドによる建設の工程

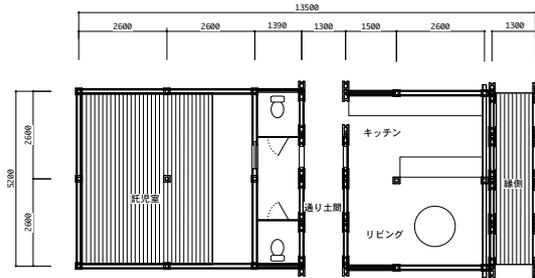


図11 第6フェーズ後の託児所平面図

注釈

- *1 7世代という期間の設定の背景
アボリジニの昔からの言い伝えとして、『どんなことも七世代先まで考えて決めなければならない』という理念があり、一本の木を切る時も七世代先の子孫のために困らないかという価値観を基準に議論する。FKV代表の宇津さんはアボリジニの長老から教わったこの生き方に感銘を受け、自身もFKVの活動でも「誰もが心豊かに平和に生きられる村を7世代先の未来の子供達に伝えたい」という願いが込められている。
- *2 When, why, who, whom, where, How long, How to
- *3 2004年より活動の記録として1-2ヶ月に一度FKVより発行される活動報告の冊子。子どもたちの山村留学体験記や暮らし方の知恵やスタッフの日記などが記されている。
- *4 本研究は2024年度本学研究事業によって行った研究である。

参考文献

- 1) 玄米10号:2004-2024.*3
- 2) ティム・インゴルド:「ラインズ 線の文化史」2014.
- 3) ティム・インゴルド:「生きていること:動く、知る、記述する」2021.
- 4) 北 雄介:「オブジェクトのメッシュワーク」モデルによる都市の変容過程の記述に関する試論」2016.